

東都大学図書館通信(深谷キャンパス)

「本好きというのは、手元に読む本がないまま時間が空いてしまうのが恐怖。いつも何冊か手元に本を持ち歩くもの」

～池上彰著『学び続ける力』(講談社現代新書) p.26～

1. 『源氏物語』しか知らない…紫式部ってどんな人?



伝谷文晁筆『紫式部図』
江戸時代・19世紀 東京国立博物館
出典: ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)

積極的でカラリと明るい清少納言に比べ、紫式部は消極的で生真面目な印象がありますが、現在、NHK 大河ドラマ「光る君へ」で俳優・吉高由里子さんが演じていらっしゃる紫式部は、とてもチャーミングで可愛らしく、親しみを感じますね。ドラマ内で描かれている藤原道長との関係性に毎週もどかしさを感じつつ胸をときめかせていますが、歴史上、紫式部は藤原道長の娘・中宮彰子に仕えた女房として知られ、紫式部と道長との関係性には様々な説が唱えられています。本ドラマではお互いが惹かれ合い、ソウルメイトのような特別な絆が描かれているように感じますが、恋愛ドラマの第一人者として知られる脚本家・大石静さんならではのオリジナルストーリーには魅了されるばかりで、今後の展開が楽しみです。

世界的に有名な日本の古典文学『源氏物語』のほかに『紫式部日記』や『紫式部集』を残している紫式部。藤原道長の命により執筆したとされる『紫式部日記』は、中宮

彰子の出産記録を中心に綴られています。史書からは窺えない宮廷行事の様子がわかる貴重な作品ですが、紫式部自身が感じた当時の心情や辛口なコメントも記されており、あまり知られていない彼女の素顔を垣間見ることができます(『紫式部日記』は女房の立場からの公的な記録と、自分の心情を綴った私的な記録が混在した日記なのですが、まさか紫式部本人もこれほどまで後世に読み継がれるとは思っていなかったことでしょう…). 紫式部の少女時代から晩年までの和歌を収めた自撰集『紫式部集』からも、彼女の人生や生活の様子を感じ得ることができますよ。

大河ドラマの紫式部に魅せられながら、皆さんなりの紫式部像を日記や歌集から読み解いてみませんか?



◆ 渋沢栄一翁が愛した言葉 ◆

人の安宅は「仁」の一ことに帰着する。
一切の私心を挟まずして事に当たり、
人に接するならば、心中常に綽々(しゃくしゃく)たる
余裕を保っていられる。



【『渋沢栄一訓言集』・処事と接物】

「仁」とは思いやりの心。私心や私欲を交えることなく相手を思いやることができれば、凜々しく心豊かに過ごすことができる事を表しています。自身の心にゆとりができれば、さらに思いやりを持って人に接することができる—まさに思いやりと心のゆとりの相乗作用です。

※格言は『渋沢栄一 100の訓言』渋澤健 著/日本経済新聞出版社 p.178より転載

2. いま、改めて災害時の備えについて考える

令和6年能登半島地震で亡くなられた方々のご冥福をお祈りし、ご遺族の皆様にお悔やみを申し上げます。また、被災された皆様に心よりお見舞い申し上げるとともに、被災地域の皆様の安全と一日も早い復興を祈念しております。

いま改めて災害時の備えについて考えるべく、石川伸一先生の著書『もしも』に備える食 災害時でも、いつもの食事を』を紹介いたします。なぜ災害時に備えて食を揃えなければならないのか? それは災害時には流通が途絶え、食べ物が手に入りにくくなるからです。石川先生は3・11 東日本大震災で被災された時、自治体で備蓄していた食料があつという間になくなったり、震災から数日後に1~2時間だけ店が開いた時に何百人も並んだりという光景を目の当たりにし、自助の備蓄の大切さを実感したそうです。「普段どんなものを食べているか」を考えることが備蓄のポイントだそう。食べ慣れたものや温かいものはほっとした気持ちになりますね。また、被災時には限られた条件下で調理しなければならないため、日頃からあり合わせのものでパパッと作れるスキルがあると良いそうです。水の備蓄やトイレ対策は最重要、市販の非常食をチェックしておくことも大切だそうです。備えがあれば心理的な安心感も生まれます。



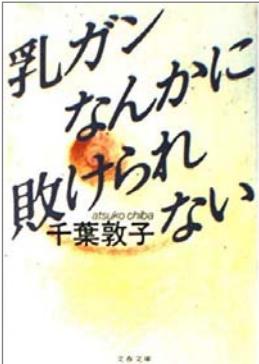
「もしも」に備える食
災害時でも、いつもの食事を
(石川伸一ほか著 / 清流出版)

3. POP 展示会@紀伊國屋書店新宿本店



2023年9月に実施された学生選書ツアーに続く企画として、POP展示会「東都大学 学生が選んだおすすめ本」が紀伊國屋書店新宿本店3階アカデミックラウンジ前で開催されました(2024年1月13日(土)~31日(水))。学生手作りの色鮮やかで発想力豊かなPOPとおすすめ本と一緒に展示された光景は圧巻で、お客様が本学のPOPを眺めたり、展示棚から本を手にとってご覧になったりする様子を目にした時には、胸に熱いものが込み上げてまいりました。書店の担当者様より、本学の展示棚からも本が売れていたと同じ、学生たちがお客様と本とをつなぐ架け橋になったと感じ、POPを作成してくれた学生たちにこの嬉しさを届けたい気持ちでいっぱいになりました。

紀伊國屋書店様におけるPOP展示会は終了しましたが、ただいま図書カウンター前ではPOP展示会を再現しています。様々なジャンルの本が並ぶおすすめ本コーナーは華やかで、思わず本を手にとってみたくなる雰囲気に包まれています。ぜひ学生たちの「推し本」をご覧にいらしてください。



文春文庫『乳ガンなんかに敗けられない』千葉敦子著

公衆衛生看護学領域 吉羽久美

看護大学に入学することは、憧れだった看護師への道の第一歩をスタートできる喜びを感じる人もいれば、「自分は看護師に向いているのか」という葛藤に悩む人もいます。私は間違いなく後者の方でした。そのために大学の授業に集中することができず、成績は低迷し、教員からは「やる気のない学生」とレッテルを貼られた様な状況でした。そんな私の悩みを聞いてくれたのは、臨地実習を共にした仲間と担当教員であり、またもう一つが、ここで紹介する千葉敦子さんの著書『乳ガンなんかに敗けられない』でした。看護職という道を歩き始めたばかりで、自分に自信が持てない私に、この本は大きな勇気を与えてくれ、心の拠り所となりました。

著者の千葉敦子さんは、フリージャーナリストで、日本人女性としてのパイオニアです。大学を卒業した後に、男社会の新聞社に飛び込み、経済部の新聞記者になりました。その後、奨学金を得てハーバード大学大学院に進学をし、それから国内の一般企業での勤務を経て、フリージャーナリストとして独立を果たし、世界中に記事を発信しました。この頃に乳がんの診断と治療を受けながら、病気にひるむことなく仕事を続け、アメリカに移住をしています。彼女の生き方は常に

前向きで、日本の伝統や価値観にとらわれず、女性としての新たな道を切り開いていったパイオニアでした。彼女は、乳がんの体験談を綴ったこの本だけではなく、若い日本人女性へのメッセージを書いた著書も出版し、女性が夢を持って生きる大切さを発信し続けていました。一方で、この著書を読む前の私は、自分に対する肯定感が持てずにいましたが、この本を読んだ後に自分の世界が大きく開け、いかに小さな出来事に悩み続けていたかを気付かせてくれました。

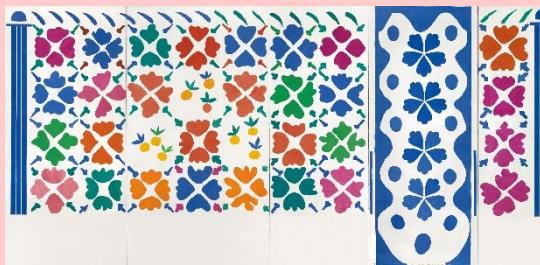
彼女は残念ながらがんが再発し、1987年に47歳で逝去されました。しかし、彼女の生き方、メッセージは今を生きる私たちに明るい灯を照らし続けてくれています。ジャーナリストという私たちとは異なる分野で活躍をした人ですが、その生き方と力強いメッセージは分野を超えて、読者に力と勇気を与えてくれています。希望が持てずにいる人、自分が歩む道が見えないと思う人は、彼女の著書を一度読むことを強くお勧めします。この本は絶版となっていますが、図書館で借りることで読むことができます。この本に限らず、彼女の著書は皆さんに強くお勧めします。

マティス 自由なフォルム

パブロ・ピカソと共に、20世紀最大の巨匠の一人と称されるフランス画家アンリ・マティス(1869-1954)。色彩の魔術師と呼ばれ、フォーヴィスム(野獣派)^{*1}の中心的な存在であったマティスですが、温厚篤実な人柄であった彼はフォーヴ(野獣)と呼ばれることを好み、より洗練された色彩表現を追求していました。マティスが芸術と出会ったのは、療養生活を送っていた頃です。パリの法律学校を卒業後に法律事務所の事務員として働いていたマティスは、体調を崩して休職をするのですが、療養中に母親から贈られた絵具箱がきっかけになり絵を描く面白さに目覚めました。それから60年以上にもおよぶ画業の歩みの中で、熟慮と試行を重ねてマティスが辿り着いたのはハサミと紙による「切り紙絵」です。助手に色を塗ってもらった紙をハサミで切り抜き、それらを組み合わせて活き活きとした構図に仕立てあげる切り紙絵は、色彩表現とデッサンが同時にできるという利点をもたらし、彼が長年悩んできた色と線との関係性の問題を見事に解決してくれました。筆とカンヴァスの代わりに「ハサミでデッサンする」という手法で自由自在に色とかたちを生み出したマティスは、この新たな手法で新境地へと歩みを進めるのです。

展覧会「マティス 自由なフォルム」では、マティスが晩年に力を注いだ切り紙絵に焦点を当てながら、絵画、彫刻、版画、テキスタイル等の作品や資料、約150点を紹介しています。見どころは、なんといっても4.1×8.7メートルの大作である切り紙絵《花と果実》です。ニース市マティス美術館のメインホールに展示される本作品は、今回の出品にあたり大規模な修復が行われました。今回が日本初公開。見応え十分です。また、マティス自身が「生涯の最高傑作」と評したヴァンスのロザリオ礼拝堂は、切り紙絵を応用した彼の総合芸術作品です。建築の室内装飾から典礼品の調度品、司祭服にいたるまでを指揮したマティス芸術の集大成で、本展ではロザリオ礼拝堂内部を体感できる空間を展示室内に再現し、切り紙絵の技法による色彩豊かな美しいステンドグラスをご覧いただけます。マティスの切り紙絵を本格的に紹介する展覧会は日本初です。ぜひお見逃しなく。

*1 20世紀初頭にフランスで起こった絵画運動。
鮮烈で自由な色彩と大胆な筆触による平面的で装飾的な表現が特徴。



◇ ちょこっと図書紹介 ◇



世界でいちばん透きとおった物語
(杉井光著 / 新潮社)

知人の紹介で手にとった『世界でいちばん透きとおった物語』。「紙の本でしか体験できない感動がある」という帯の言葉は本当に本当でした。読んだ後にそのすごさが響きます。爽快感に包まれる1冊。何を読もうか悩んでいる皆さんに強くお勧めしたい本です。

◆ 河津桜 ◆



©2024 Kawazu Nagatoro

1955年頃、静岡県河津町に住む飯田勝美氏が偶然発見した桜の苗を自宅の庭先に植えたものが河津桜の原木と言われています。緋寒桜と大島桜の自然交配種とされる早咲きの桜で、鮮やかなピンク色の花が咲き誇ります。春、彩りの季節の到来です。

◇ 図書館からのお知らせ ◇

2024年3月11日(月)~31日(日)は蔵書点検のため図書館は休館します。ラーニングコモンズは通常どおりお使いいただけますので、ぜひご活用ください。